

保前信英

nobuhide homae

ネガティブ・ フリクション

闇の溶解



Negative Frictions

信英

ネガティブ・ フリクション

闇の溶解

Negative

Frictions



書下ろし長編サスペ
ンス・ミステリー

ネガティブ・フリクション

やみ ようかい
闇の溶解

平成11年 6 月10日 初版第 1 刷発行

著 者 ほ 保 まえ のぶ ひで
編 集 がく 楽 じん じん しや
社

〒101-0061 ☎ 03 (5282) 4481

東京都千代田区三崎町 1-1-9

発 行 者 渡 辺 起 知 夫

発 行 所 しよう 祥 でん 伝 しや
社

〒101-8701

東京都千代田区神田神保町 3-6-5

☎ 03 (3265) 2081 (販売)

印 刷 萩 原 印 刷

製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえます。
内容についてのお問い合わせは楽人社までお願いいたします。
Printed in Japan.

ISBN4-396-63146-4 C0093

© Nobuhide Homae, 1999

祥伝社のホームページ・<http://www.shodensha.co.jp/>

ネガティブ・フリクション

闇の溶解

カバ！扉画 浜田知明「かげ」一九六二年・エッチング
(写真提供・求龍堂)

装幀 渡辺 理

個人は外にむかっても内にむかっても存在する。

（ヘーゲル『精神現象学』長谷川宏訳）

目次

第一章 疑念 炎のなかで——9

第二章 聖城 見えざる者の声——41

第三章 軋轢あつれき 汝なんじなすべし!——89

第四章 探索 未出現の悪——123

第五章

陥穽

謎の底の死——169

第六章

聖餐

他人の皮膚——191

第七章

侵入

饗応のからくり——233

第八章

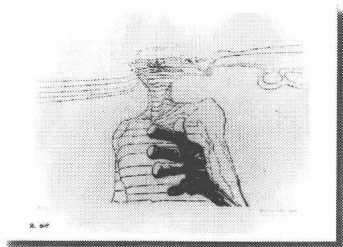
遡行

暴かれる深層——267

第九章

瓦解

沈みゆく巨塔——299



夜空の黒が、ゆるやかに溶解しはじめ、街区の隙間にたち込めた暗闇が溶け出す頃、ある異変が密かに進行しようとしていた。

はるか数百メートルの地底で、人知れず溶融がはじまった。暗黒の固い地殻が、身悶えするかのよう動き出したかと思うと、水を含んだ角砂糖のように、たちまち形をなくして崩れた。固体から液体へと変貌をとげた流動は、渦巻きながら、静かに、異なる地層へと浸透して行く。はじめのうち、ごく一部で生じた液化化現象は、見る間に連鎖反応を引き起こし、触れ合う地層を次々と溶かしながら攪拌してひろがった。

激震がつづけざまに起きた。抵抗力をなくした地盤は、ブラックホールとなつて、地上のあらゆる構造物を呑み込み、地表面は、砂時計の砂が落ちるように消失した。あとには蟻地獄さながらの巨大なすり鉢状の陥没が出来ていた。するとその底から水が沸き立ち、ひとしきり、気泡を吐いた。それがおさまると、地面は鏡面となつて夜明けの雲の流れを映し出した……。

第一章

疑念

——
炎のなかで

火柱^{ひばしら}が立ちのぼっていた。

杉浦健司^{すぎうらけんじ}は反射的にベッドから身を起こしたが、体内の時は瞬時に凍りついた。そのときすでに天井かくの火炎はとぐろを巻き、黒煙を吐いて、めくるめく絵巻をひろげつつあった。

いったいなが起きたのか、どうすればよいのか、咄嗟^{とつさ}に判断できなかった。災難が大きければ大きいほど、たいていの人間は、とまどうばかりで有効な手段に打って出ることなどできないものだ。しかし杉浦のなかでは、火災は特別な意味を持っていた。炎と煙への過剰^{かじょう}反応によるパニックが、意識の中に一瞬、奇妙な空白をつくり、そこに恐ろしく混濁^{こんだく}した想念が雪崩^{なだ}れ込んできた。

あなた！ 助けて！……声が聞こえる……おれを呼ぶ声……由紀子^{ゆきこ}の声だ……どこにいる？……お前！ 行くな！……なぜ行ってしまうんだ……代わりに息子の呼ぶ声……パパ！ 火炎の中に三、四歳の子供の姿が揺らいで見えた……大きくなつたな、伸司^{しんじ}……おい、どこへ行く……こっちにこい……手を伸ばして抱き寄せようと思うができない……どうしてだ……遠くでサイレンの音が聞こえる……あちこちで怒号が飛び交^かっている……ああ……由紀子と伸司が消えてしまった！

幻聴^{げんちょう}と妄想^{もうそう}の嵐が過ぎ去つても、杉浦は、両手で頭を抱えたままだった。身体が強張^{こわば}っていた。おそらく、死にいたる道すじとはこんなものだろう……。そんなことを脳裏^{のうり}で反芻^{はんそう}していた。

死にゆく人々は、みずからの死への道程をはっきりと自覚しているものだ……ただその状況を他人に伝達する機会がうしなわれているだけで……。

このままではほんとうにおれは死ぬぞ！

朦朧となりかけた意識の中で、もう一人の自分が呼びかけた。瞬間、覚醒してわれに返った杉浦だったが、見ると、ベニヤ製の壁が焼け落ちて、隣室が覗けて見える。

とたんに異様な臭気に襲われた。凝視すると、執拗な炎の火元は、隣室に置かれていた塗料や接着剤として使われる有機溶剤などが入った大型のドラム缶であることが分かった。つまり、火災は徐々にその手をひろげたのではなく、爆発的に姿を現わしたわけだった。

特設の倉庫に保管されるべき可燃物質が、現場小屋の物置に仮置きされていたことは杉浦も知っていた。そのくらいの法規違反はこの建設現場でもやっている……しかし、なぜそれがこんなときに発火したのだ？ と胸の内で叫んだと同時に、炎の柱は天井を焼き、ベニヤの天井材が剝落しはじめていた。パチパチと木材繊維のはぜる音がし、火災はたちまち左右にひろがり壁となつてそそり立つ。

いまこいつを突破できなければヤバイぞ！

咄嗟の判断で、ベッド脇に置いてあったスーツケースをドアのほうへ思い切り蹴り出した。その衝撃で、立て掛けられていた材木が火を上げながら倒れ、避難経路をふさいでしまった。鼻を刺す猛烈な刺激臭が肺と頭に充満してきた。薄れゆく意識をふりしぼり、目を見開いて気合いをかけても身体が動かない。そのうちに真つ黒な煙が杉浦の頭上から覆い、視界がふさがって呼吸すら困難になってきた。

その直後に襲いかかってきたのは、仮眠室に放置されていた大量の断熱材だった。濃厚な煙の中から、赤い舌を出すように炎が現われると、白い発泡スチロールや青いスタイロフォーム（断熱材）を

舐めてたちまち溶かし、黒々としたどろどろのコールタールに変えた。

それから粘りつく高熱の液体が黒い雨となって、躰の上にボトリボトリと降り注いだ。杉浦はなかに無意識のうちにも必死に黒い熱湯のしずくを払いのけようと両腕を振り回したが、粘着質の雨は、いったん皮膚に粘りつくと、もうけっして拭うことができず、全身は、ベツトリと付着した高温の粘液に焼かれるだけだった。

そのとき、薄れかけた意識のかなたから呼びかける声が聞こえた。

「杉浦さん！」

今度は幻聴ではなかった。

どこからか、女の声が聞こえたような気がした次の瞬間、全身を叩かれたような気がした。バケツの水が躰にかけられたのだと悟った。杉浦の全身に粘りついていていたコールタールは、一瞬のうちに冷えて硬化し、床に倒れた躰の衣服から、バラバラと破片が剥がれ落ちた。

気づくと、何者かに背後から両脇を抱えられるようにしながら、杉浦は仮眠室から引き摺りだされていた。火傷を負った患者を救出するさいには、腋の下を支える方法が有効とされている。たとえ全身を火にあぶられたとしても、その部分だけは難を逃れるケースが多いからである。

おれは……助かったのか……しかし……由紀子や伸司からは遠ざかってしまった……もうすこしで……いっしょになれるところだったのに……。

杉浦は、意識をうしないかけてはいたが、自分を助けてくれたのが、高島千恵子であるらしいことは、おぼえのある香水の匂いで分かった。と同時に、なにやら焦げついたような臭いは、自分の衣服（現場から借りたブルーの作業服）に火が移ったためらしかった。その小さな火を千恵子の手が

はたいて消したのだ。杉浦の軀を引き摺って行く千恵子は力強かった。屋外の階段を降りて行くとき、杉浦の両足の踵が鉄骨階段に当たりカンカンと音を鳴らした。仰向けになった杉浦の目には、八月の入道雲を黒煙が覆っていくさまが不気味に眺められた。ようやく地面に寝かされると、野次馬のざわめきが耳に届いてきた。自分が助かったことを知り、ちかくに焦げ跡のついたスーツケースが転がっているのを目にすると、急に神経が弛緩し、そのまま前後不覚となった。

一九九六年八月一日の昼頃、もつと正確に言えば、現場全体が昼休みに入ってまもなく、杉浦は最初の危機に瀕し、命拾いしたのだった。

前夜は現場との打ち合わせが深夜にまで及んだ。そのあと設計者とともに現場内での確認作業に手間どり、コンサルタントとしてひととおりの仕事をすませたときには、すっかり夜が明けていた。現場小屋の一階隅にあるシャワー・ルームを使い、現場から調達された下着とジャージを着込んだ。スニーカーも用意されていたので、革靴は、洗濯物のシャツなどいっしょに脱衣所のロッカーに入れておいた。

すでに朝の八時を回っていた。杉浦は、昨夜からの長時間の打ち合わせで食事をする暇がなく、十二時間以上、なにも口にしていないことに気づいた。首に手拭いをかけたまま、二階への鉄骨階段を上がって行く。アルミの引き戸を開けると、職人や業者やらが行き交い、打ち合わせテーブルでは数人の男が頭を寄せあつて施工図を検討している最中だった。つまり現場事務所内は、いつものように朝の喧騒につつまれていたわけだ。窓のブラインドからは朝日が差し込んでいた。

プレハブ小屋とはいえ、内観はふつうのオフィスフロアと変わりがない。デスク類などの什器も最

新のものが使われているし、随所に鉢植などのグリーンを置いてある。とうぜん冷暖房完備だし、トイレは温水洗浄器付きだ。食堂にはカラフルな椅子とテーブル、大型テレビが据えられている。

建設現場は、いわゆる3K職場の代表のように言われて久しい。しかし、世間の目が向けられたせいで、大手ゼネコンの増田建設は改善を急いだ。その結果、現場の労働環境は著しく向上したのである。

杉浦は、自分の場違いな格好を意識しながら、受付ちかくの女子事務員に工事主任の山野を呼んでもらう。じきに青い作業服姿の若い男が現われた。

「ごくろうさまです。お弁当と寝床は用意してありますから」

山野は礼儀正しく頭を下げた。細面の頬が紅潮している。いつもメタルフレームの丸メガネをかけているのはお洒落のつもりか。まだ二十八歳だというこの男は新米の工事主任で、三月に現場が着工してから、工事長の大場とコンビを組んでいた。実質的に彼ら二人が現場を取り仕切り、牛耳っている。つまり、彼ら以外の職人連中は全員が下請け業者に属するわけだ。

仕出し弁当を山野から受けとった杉浦は、湯沸かし室に入り、観音開きの大型冷蔵庫から缶ビールを取り出した。冷蔵庫の中には同じ銘柄のビールがぎっしり詰まっていた。瓶や缶、さまざまなサイズがあったが、どれも同一銘柄なのはわけがある。法人営業の関係で、建設現場はビールの銘柄を特定されるからだ。宴会、打ち上げ、着工式、上棟式、竣工式……と、建設現場はあらゆる場面で大量のビールが必要とされる。したがって一括契約する必要があるのだが、銘柄の選択は、現場の母体である本社建築本部の采配や、施主との関係によって決定されるのである。

杉浦は五百ミリリットルの缶ビールと弁当を手にして事務所を出ると、廊下を進んで仮眠室の引き